

第55回神奈川建築コンクール 住宅部門審査総評 審査委員 富井正憲

今年度は個人住宅75件、共同住宅20件、合計95件の近年では最多の応募があった。選考はこれらの応募作品のうちから書類審査を通過した18件の現地審査を行い、最終審査で優秀賞10件、アピール賞1件の合計11件（個人住宅10件、共同住宅1件）を入賞作品に選出した。残念ながら今年是最優秀賞に該当する作品はなかった。

入賞作品の中でも高い評価を受けたのは、「出窓の家」「富士見町の家」「Kiti」「sora2」「Nowhere but Sajima」である。「出窓の家」は、立方体の入れ子構造に大小6つのくさび（出窓）を差し込み、多様な場所を確保した開放的な気持ちよい作品である。難を言えば庭との関係にもう一工夫がほしかった。水を楽しむ「富士見町の家」は、外部を無機質素材、内部を木造でまとめた設計も施工もたいへん質の高い作品である。折板屋根の谷から落ちる雨だれを楽しむ生活は幻想的で魅力あるが、水との関係がそれだけでは物足りなさも残った。「Kiti」は、単純な7角形の筒型の中にさまざまな高さとボリュームを持つ場所を用意した未完の建築である。今後は住み手が徐々に自身の手で作り上げていく原始の家のおおらかな骨格がさわやかな魅力であった。「sora2」は、4住戸の共同住宅である。高い天井とスキップフロアの採用による豊かな内部空間、それに自分だけの美しい空を所有できるパティオの存在がこれまでにない共同住宅として評価された。「Nowhere but Sajima」は、一週間単位の賃貸住宅である。別荘としては勿論、地域の人とタイアップしながらって住宅が持っていた冠婚葬祭やさまざまな催しを行う場として、ソフトとハードの両面で新時代の住宅像を実現している。洗練された海辺の作品はD・ホックニーの絵のように美しくみえた。

その他「材木座の家」「稲村ガ崎の家」「高台の家・G邸」は、特に確かな敷地の読み取りとその解決、設計施工における密度ある表現が認められた。また「流星庵」「木箱・片瀬」は木構法をテーマとした質の高い設計と施工が評価された。

アピール賞の二世帯住宅「篠原の家」は、共に住む老世帯への福祉に対する細やかな配慮が認められた。

建設住宅を対象としたコンクールとしては、日本で最も歴史のある神奈川建築コンクールに、年々若い人たちの応募が増え、かつ作品の水準が高くなってきていることは審査する側としてはたいへんありがたく、喜ばしいことである。現地審査で建築主の方々にお会いすると、住まいへの関心の深さと、住み手の価値観がうまく表現され

た作品が多いことに驚かされる。こうした住み手の住文化への意識が高まっている反面、応募作品の中には設計者の単なる造形追求への偏りが目立つのも気がかりである。

設計者は建築主と共に住宅の根源的なテーマにしっかりと向き合ってもらいたい。住生活とは空間から刺激を受けて生き生きすることであって、単なる機能の箱ではない。家庭とは家と庭の二つの漢字が連結してできおり、家と庭がバラバラでは住居は成立しない。集合住宅とは人間が集まっていかに楽しく生きるかであり、各々が勝手気ままに住む孤立住宅ではない。こうした住まいの根源的な課題に応える刺激的で楽しい作品の応募を今後も期待したい。